

歴史資料講座

倉敷町史編さんに向けての大森一治の足跡 付. 大森日記の紹介

I. 旧倉敷市史（町史）発刊の経緯

昭和 2 年 (1927) 4 月	都窪郡倉敷町、万寿・大高両村が合併し倉敷市となる
11 月	倉敷自治顕彰会が町史編さんを決定、翌年、最初の町史編集委員会
昭和 19 年(1944)	編集者菅氏の退職と戦後の混乱により原稿が行方不明となる
昭和 30 年(1955)	倉敷市史刊行委員会発足
昭和 35 年(1960)	永山卯三郎著『倉敷市史』全 25 冊、60 部限定を発刊
昭和 48 年(1973)	永山卯三郎編著『倉敷市史』全 12 冊を発刊

《1920 年代(大正後期～昭和初期)の郷土史の流行》

- ・ 郡誌の発刊 (川上・上道・浅口・御津・久米・真庭・苫田・英田等)
- ・ 岡山県郷土史学会の活動 (『郷土史学』発刊 1923 年以降)
- ・ 岡山市役所『岡山市史 全』(1920 年) / 町村史の発刊 (『御野村郷土史』1928 年)
- ・ 郷土史家による書籍発刊 (小林久磨雄など)

倉敷町では

- ・ 木山巖太郎の史談会が『倉子城』発刊 (1918 年) / 都窪郡教育会『都窪郡誌』(1923 年)
- ・ 井上伯一『倉敷町沿革史』(1926 年) / 倉敷町『倉敷町々政要覧』(1926 年)

II. 大森一治と郷土史のかかわり

《経歴》

大森家(屋号帯江屋)は江戸時代の「新禄」の家。天明 8 年(1788)に新義衆として「義倉」に参加。家屋は東町(現本町)

明治 10 年(1877)	穀物商を営む大森武介の長男として出生
明治 20 年代	高等小学校卒業後、閑谷黌で学ぶ。中退し家業の穀物商を手伝い後に継ぐ
明治 25 年(1892)	倉敷町の青年の教化事業にあたる共立会を提唱、活動を進める (15 歳)
明治 35 年(1902)～	大原孫三郎と知り合い、孫三郎の文化・社会活動にしばしば助言する (25 歳)
大正 10 年(1921)	倉敷文化協会会員となる、会誌編さんを担当 (44 歳)
大正 13 年(1924)	漢詩の吟社「甲子吟社」を作る
昭和 2 年(1927)	倉敷町史編さんにかかわる (50 歳)
昭和 11 年(1936)	逝去、享年 59 歳

◎大森一治は文化・歴史の見識が高い市井の知識人。同時代の社会にも関心を向ける

《青年期～壮年期の活動》

明治 37 年(1904)	「有志懇親会」で講演し「郷土史の必要」について力説（26 歳） その後、独力で歴史資料を調査、書画骨董を収集、スケッチにて画を残す。 日記を書き続ける
---------------	---

【資料調査の例】

- ・明治 30 年より昭和期まで「郷土資料 疎梅山人輯」を記録。倉敷に関する事件・文学作品・関連の史料の抜き書きなど。
- ・明治 42 年(1909)までに「諸家の断簡零墨を募集」し、30 余名分となる
- ・大正 15 年(1926)に山川鍊平家を調査。維新前後一切の公文書の書写数百枚を確認

《明治 44 年(1911) 6 月の転機（挫折）》

一治と父武介は家産の立て直しを決意し、妻の実家大塚家より借金をする（「拱壁日記」より）

史料 義父・大塚精一が示した改革案
一、従来之文章風流は七分、家業三分なるは大なる誤なるものとの事 ○文章風流三分は廃すべからず、商業八分とすべし
一、従来人之世話事また公共の事を發達に世話せしは誤れるとする事 ○十のもの三分は人の世話事もすべし、又十の三分は公共の事もすべし（中略）
一、書画書籍諸道具を買い入れ大金を費やしたるを後悔する事（中略）
一、これまでの日記を廃すべからず
一、倉敷町古人の事績等の取調べ町史編纂するに怠りなからん
一、命有ての物種、愉快に働く事（後略）

◎一治は深く嘆き、反省し、親族との約束を守り、骨董・書籍購入を絶ち公共活動をつつしんだ。  
反面、日記の執筆量が激増。散文的な文章を書き連ね気を紛らわした。

《大正後期の活動》

再び日記の執筆状況が以前の様子に戻る。

大正 7 年(1918)	家業の米穀商とのかかわりもあつてか、日記に倉敷町と周辺の米騒動の状況を詳細に記す（「鳳尾日記」）
大正 8 年(1919)	知人の詩稿を批正したり、知人の骨董を見学

《大正 15 年(1926)の転機》

3 月 4 日	今在孝市助役から、5 月の東宮来臨の際に奉献する「我が沿革史」につい
---------	------------------------------------

3週間後	て申し受ける。 その後、大原孫三郎、原澄治へ相談。「町史作成の事、今日余の双肩に有り」助役に返信。合わせて林源十郎、木山巖太郎、高見郡長らを訪問し「町史進献本」について相談。意見を受ける。
------	---

◎独自の構想があったと思われるが、消極的意見を受け、自身の構想は退ける。

4月14日	『町政要覧』の「沿革編」部分について本格的に執筆開始
4月28日	原稿へ改訂対補をして、再び役場へ提出
5月25日	東宮来町、『町政要覧』を献本

◎助役の談「かよう（斯様）の事お書きなされては事面倒」「文学史、人文史の如き淫りに数万言は思いもよらぬ事也」 町長「簡単明瞭成程かかぬが一番よろし」

8月	岡山師範学校教諭の永山卯三郎より天領時代の村役人公選制について質問あり、回答する
----	--

《昭和2年(1927)開始の倉敷町史編さん事業》

4月	倉敷自治顕彰会が組織され、町史発刊を計画
同月	倉敷町と大高村・万寿村が合併し倉敷市となる
7月21日	評議会で町史編さん事業が正式に決定。一治は顕彰会長・原澄治へ事業の手助けの希望を伝える
11月	菅正十郎が主事となる。一治が囑託的な立場で協力することが決定

◎郷土史家・大森一治の活動の意義

- 1) 倉敷町の有力者に郷土史について認識させ、編さん事業着手に影響を与えたと思われる
- 2) 近世～近代の史料調査を長期にわたり続け、町内外に知られる
- 3) 文芸史に重きを置いた。例えば岡雲臥の検証を進めた。  
⇒ 家業を営みつつ、郷土史家として生きた人

### Ⅲ. 「大森日記」について

明治34年(1901)～昭和11年(1936)に付けられた日記。全59冊。『臨会記』『日聴語存』の2冊を除き、『〇〇日記』というタイトルがつけられた。(『香泥日記』『石煙日記』など) 昭和2年(1927)から『郷土現事記録』『倉敷町史編輯日記』を別に記録。

《評価》

「近代の倉敷のおける大いなる遺産の一つ」、「近代倉敷の研究には欠くことのできない第一

級史料」として、『新修倉敷市史』近現代編で多々引用されている。

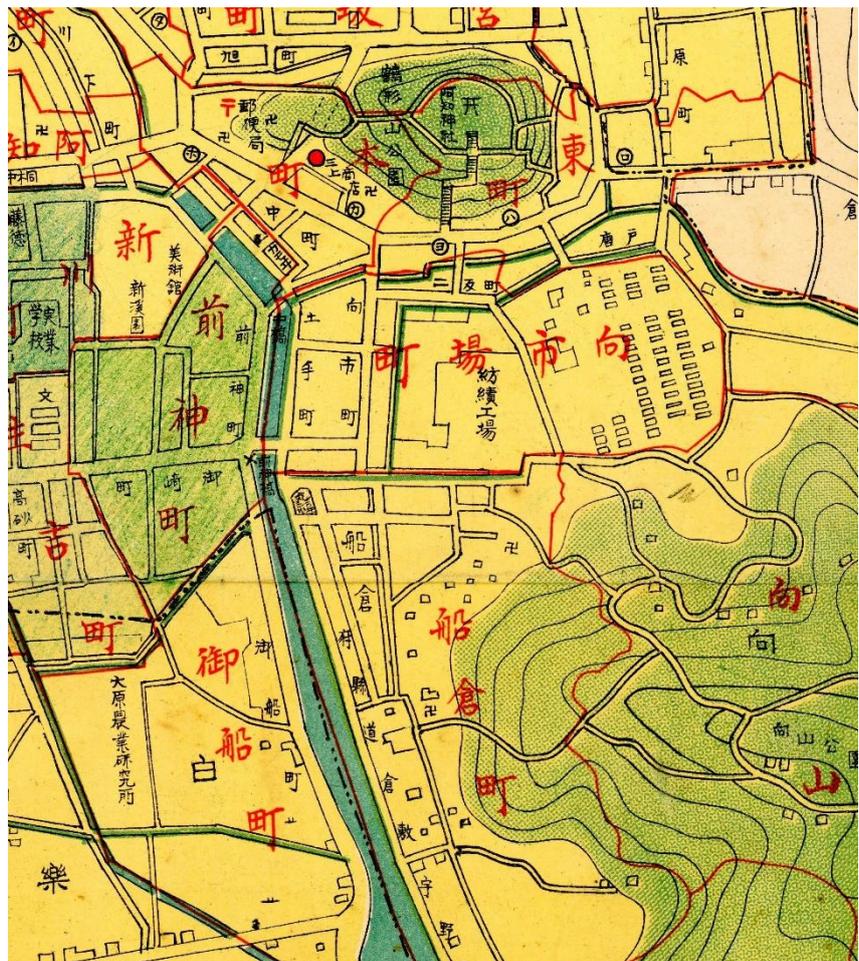
《特徴》

- 1) 倉敷での出来事について詳細に書き留める（政治・経済・社会・文化・民俗・人物・世相）
  - 2) ほぼ毎日の記載。同時代の倉敷が読み取れる
  - 3) 大原孫三郎と親交を深め、孫三郎の活動を身近で記している
- ◎ 郷土の歴史にかかわる大森一治のもう一つの業績

◆事例紹介 市街地の拡大

明治40年の改修工事

（「弾琴日記」明治40年3月25日）



「倉敷市新地図」より抜粋  
（昭和10年 倉敷市歴史資料  
整備室蔵）

「(前略)

本館の位置を東に取り広げる、四十年前の代官所は今やその小さき山の姿をすら全く失うて、この大工業地を現出したとは、夢にも思わぬ変化であるか、この度は又それに次ぐ大変化となるのである。

現今の職工寄宿社宅の敷地が、度々地上げしては取り広げられた事は誰もよく知る処であるが、今や全く字唐戸の内を用水川を南より一帯に、日間道新井戸細道を限りて埋立地上げして了う。それも田地から民家までもそれぞれ取り払われて、一大変化をするのである。

(中略)

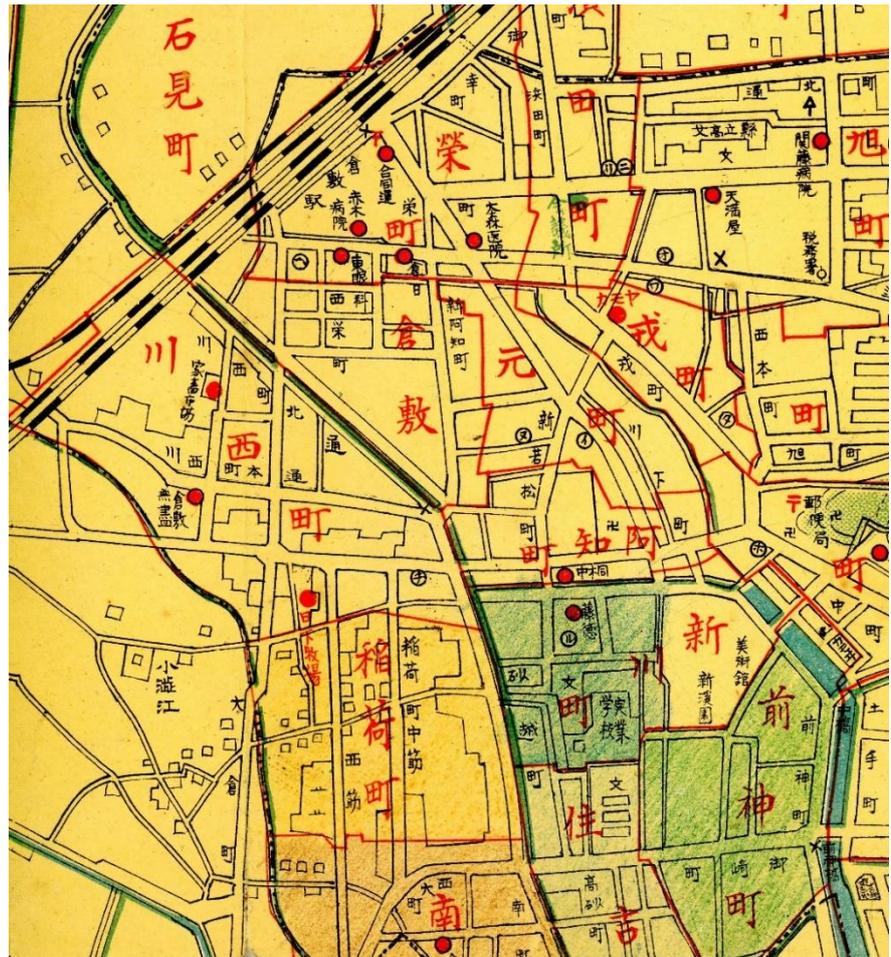
又事所兼用として二反、道路を一線として表へ抜け、向市場へ面した人民を一切取り払うて

改築することとなった。この辺りの地は皆な大原家の所有だから、相談は直に行われるが、唐戸の前通りは種々の家に持て居たから、容易に売買が出来なかった。

(中略 唐戸で 23 軒、向市場で 13 軒取り払い)

その上社宅は全く分離して、御舟の下手白楽市境を約一町以上、四角の田地を埋立てて居る、この辺りも全く一変化を呈する (後略) 」

明治 44 年の改修工事  
〔「焚竹日記」明治 44 年  
4 月 27・28 日〕

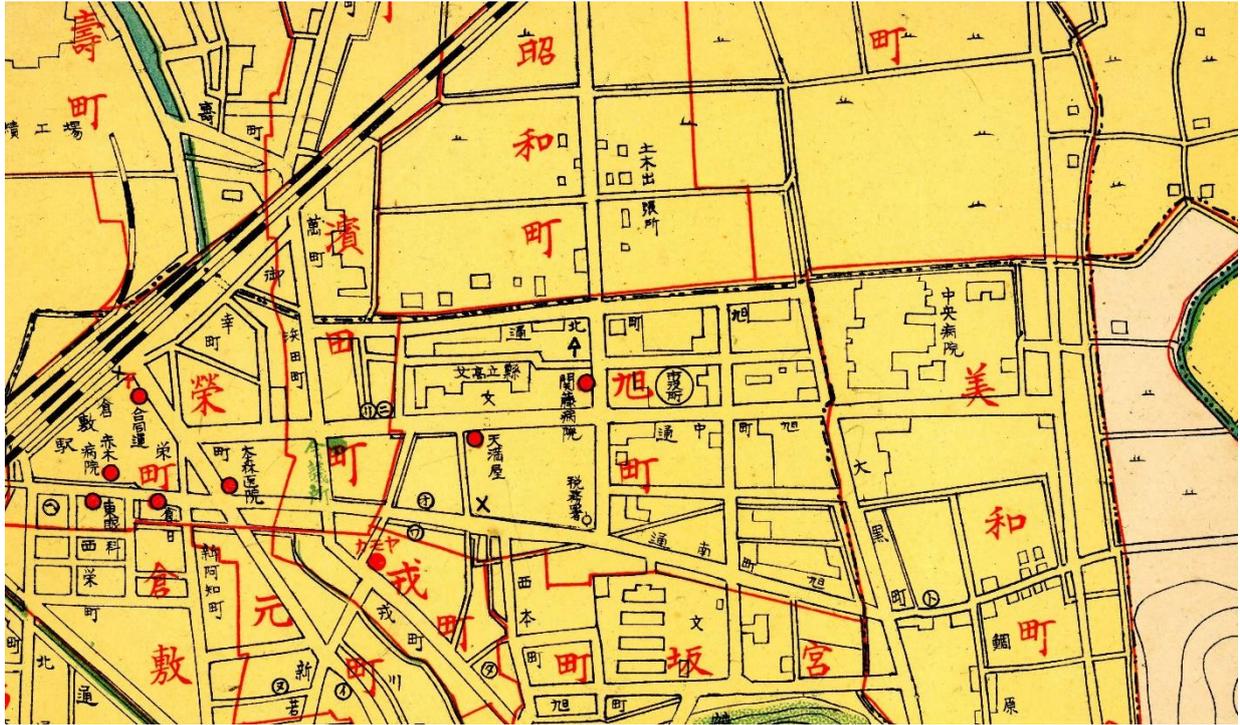


〔 (前略) 〕

一新川中程へ新に青物市場を創設すべく、目下工事最中である、この事は最初停車場通り説と二派で久しく決せざりしが、終に南派の勝となったものがそれで、目下この重なる営業者は庭平、藤徳、その他三五人のものだ。四方へ借家風の家、真中が梁建の柱に (バラック風) 市場を形作って居る。

(中略)

一川西町・四軒屋の端々へ借家建が沢山出来た。戸数も年々増加して往くらしい。川西町は姫屋ばかり (その実四五軒) だと一口には言えぬ。だんだん西へ膨張して居るから、今に一番繁昌な処になろう。又四軒屋は何でも住民相議して、新に西大町と改正を出願するとかしたの咄もあった。(中略) 」



「一浜田町入り口栄町東突りの宿屋を一軒、遂に取り毀し終えた。それで既に新道路も成工、遙に新郡役所の高壮なるを遥むなど、一見市街風を構成した。此処へ新郡役所を設置せらるるや（昨年秋）、直に貫通道路案として、この打ち抜きを決議したものそうな。しかし示談が余程行悩た為、結局本年三月末迄の補助金下附期限に漸く一段落となった。

（中略）

一新郡役所前より山之後を南に、直に東本町原邸前へ出ずる道路は、大原家の単独寄付で訳もなく竣工した。経費一千五六百余円と聞き及んで居る。それで兩岸及び明け地へさして目下続々と借家新築最中である。沢山建て居る。郡役所前あたりへも建かけた。不遠一変するであろう。

（中略）

要するに物質的に於いては、東方を除きて三方へだんだんと発展しかけて居る。しかりて「倉敷の富」の程度は如何になりつつありやとは議論となる」

◎道や区画が新築・改修され、道に沿って「借家」が増加することがよくわかる。このような忘れられそうな町の変化を日記より確認することが出来る。大森日記は事象・事件の宝庫。

《参考文献》

『新修倉敷市史』5、6、11、12巻

大森久雄「倉敷町史編集小史」、「倉敷市史刊行小史」(上)(下)『倉敷の歴史』第1～3号

松尾民子「倉敷文化協会の設立と西洋絵画展覧会」『倉敷の歴史』第3号

立石智章「倉敷市所蔵岡山県都窪郡倉敷町大森家文書」『倉敷の歴史』第24号

首藤ゆきえ「倉敷町史編さんに向けての大森一治の足跡」『倉敷の歴史』第33号